【成川遺跡】㊥688P－5/18
【橋牟礼川遺跡】㊥693P－1/9

688P－1/12（欠番㊥687P－10/11 〃 －11/11）㊥688P－4/18

青ゴラ 赤ゴラ ㊥692P－10/11 6~7行

倭（わ）の投馬国（設馬（せつま）国・殺馬（さつま）国）

■火山地質学（かざんちしつがく）的に見（み）ると、指宿（いぶすき）（薩摩（さつま）半島南（なん）東端（とうたん））地方の火山灰（かざんばい）の噴出源（ふんしゅつげん）は、開聞岳（かいもんだけ）である。

■成尾英仁氏（徳之島（とくのしま）高校教諭（きょうゆ））の研究（けんきゅう）によると、

「今から約五千五百年前に池田湖（いけだこ）が噴火（ふんか）した。

次（つ）いで約四千年前に海底噴火（かいていふんか）で開聞岳（かいもんだけ）が誕生（たんじょう）した。

この時噴出（ふんしゅつ）したのが〝黄ゴラ〟と呼（よ）ばれる火山灰（かざんばい）。続（つづ）いて、暗紫（あんし）ゴラ、青ゴラなどが噴（ふ）き出（だ）した。

そして約千年前、平安時代の『貞観（じょうがん）』『仁（にん）和』の大噴火（だいふんか）で、現在（げんざい）のような薩摩富士（さつまふじ）とも称（しょう）される美（うつく）しい山容（さんよう）が出来（でき）あがった。

近年（きんねん）、開聞岳（かいもんだけ）の噴出（ふんしゅつ）による『ゴラ層（そう）』は、

⊂ 魏志倭 40P 注1

大隅 指宿

元1085P 清和・陽成天皇の年号

元1712

光孝・宇多天皇

成川遺跡 報告書 17P

688P − 2/12

指宿（いぶすき）地方の『火山灰時計（かざんばいどけい）』として見直（みなお）されつつある」という。（「かごしま考古新地図」南日本新聞社、雄山閣、三五頁参照）

■察（さっ）するところ、

(1)開聞岳（かいもんだけ）が誕生（たんじょう）してから幾星霜（いくせいそう）を経た時（とき）、薩摩（さつま）半島に、『薩摩隼人（さつまはやと）達』[redacted]が住（す）みつき——やがて『扶余（ふよ）系殷民（いんみん）の子孫達がやってきた』

(2)その後（ご）、箕子（きし）等に追（お）い払（はら）われて南下（なんか）してきた倭人（わじん）達が、指宿（いぶすき）あたりに漂（ただよ）い着（つ）き、倭国（わこく）の基盤（きばん）を築（きず）いたのだろう。

と思われる。

■もっとも度重（たびかさ）なる噴火（ふんか）によって、開聞岳周（かいもんだけしゅう）辺（へ）の遺物（いぶつ）・遺構（いこう）などは、ぶ厚（あつ）い火山灰層（かざんばいそう）の地下（ちか）深（ふか）くに埋（うず）もれてしまった。

「開聞岳（かいもんだけ）の噴出物（ふんしゅつぶつ）である『コラ』が場所によっては二〜三米（メ）も堆積（たいせき）しているから、遺跡（いせき）の発見（はっけん）が局所的（きょくしょてき）、散発的（さんぱつてき）である」という。（「成川（なりかわ）遺跡」鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(24)一九八三年（昭和五十八年）三月発行、鹿児

新や再校(2)と221P

688P−3/18

由693P 2/9

島県教育委員会、一七頁参照）

※

■薩摩（さつま）半島南東端（なんとうたん）の『成川（なりかわ）遺跡』および『橋（はし）牟礼川（むれがわ）遺跡』について、種々（しゅじゅ）述べてみたい。（第177図参照）

■参考文献（ぶんけん）を挙（あ）げておくことにしよう。

①『かごしま考古新地図』南日本新聞社、雄山閣、昭和六十一年（一九八六年）六月発行、一三六〜一四四頁。

②『古代の日本』(3)九州「角川書店」昭和四十五年二月発行、一〇六〜一〇九頁。

③『成川遺跡』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(24)鹿児島県教育委員会、昭和五十八年（一九八三年）三月発行。

④『縄文の森から』第3号〈鹿児島県立埋蔵文化財センター、二〇〇五年三月発行、二九〜四〇頁「成川群集墓（ぐんしゅうぼ）の全体像」繁昌正幸（はんじょうまさゆき）氏執筆部分。

由692P −5/1 5行目。

コクヨ　ケ−20　20×20

29頁上にルビ有る

こと

天草百村
加世田村
97頁

688P-4/12

タイトル ㊞695P-2/4
695P-

- 右頁全面に、限度いっぱい、大きく掲載しておいて下さい。
- 枠全てトル

枠トル

新規 14Q4 第177図

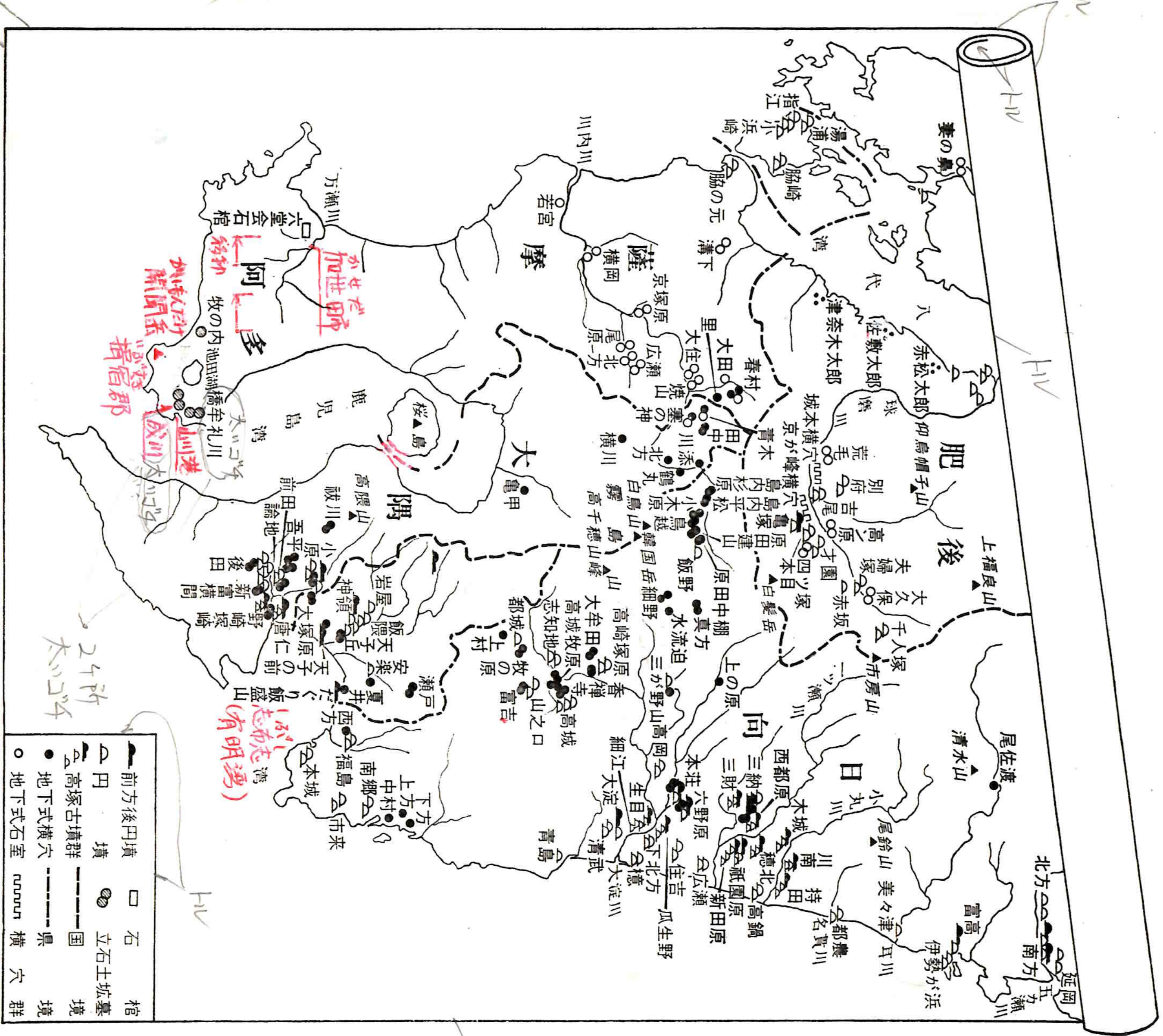
13Q4 古代の日本(3) 九州、角川書店、昭和45年2月発行、108頁参照。

1306 * ●印（地下式横穴）は、隼人達の墓制と大きなかかわりが有りそうに思われる。

大隅 ㊞867P 4行

鹿児島県百科事典（上）-224P

有明湾



薩摩
大隅
肥後
日向
鹿児島湾
加世田
笠沙
揖宿郡
頴娃
川辺
志布志（有明湾）
桜島

- ▬ 前方後円墳
- ○ 円墳
- ● 高塚古墳群
- ● 地下式横穴
- ○ 地下式石室
- □ 石棺
- ◎ 立石土坑墓
- ━・━ 国境
- ---- 県境
- ⌒⌒⌒ 横穴群

南九州~~における古墳の~~の墓制分布図

第190図
388頁 南九州の墓制3地域

← 志布志の周辺部は明治29年まで宮崎県だった。㊞696P-2/11 ㊞696P-4/11

主要　重大
重要　次頁18行
東地区
🈔688ページ-9/18行
🈔480ページ-15/21　新やまと(2)-196オ下
市町村字名大鑑52ページ
鹿児島地図
〔外 郡の場合揖〕
688ページ-5/12
本の奥付の前の頁にルビ有る

⑤　□橋牟礼川（はしむれがわ）遺跡Ⅵ（概報（がいほう））、指宿市埋蔵文化財発掘調査報告書、第十六集、鹿児島県指宿市教育委員会、一九九四年三月発行。

大カンク　概　慣ガイ
只　漢　カイ

⑥　□橋牟礼川（はしむれがわ）遺跡Ⅱ　鎌田洋昭（かまたひろあき）・中摩浩太郎（なかまこうたろう）・渡部徹也（わたなべてつや）、同成社、二〇〇九年十一月発行。

『揖宿（いぶすき）郡山川（やまかわ）町、成川（なりかわ）遺跡』

■　□成川（なりかわ）遺跡Ⅱの場合（ばあい）、地形（ちけい）に際立（きわだ）った特徴（とくちょう）が

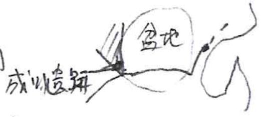
ともに

新やまと
第1巻　283オ下

688P－6/12

大きな「マール」
円形の小火口

『開聞岳』
5万分の1地図
OK



やまかわ とある
鹿児島地図

ある。

・JR山川駅から国道二二六号を西へ約二キロ

行くと、『成川遺跡』に着く。

・そこは、（低い山々に囲まれた盆地）（山

川港に隣接している~~[illegible]~~トル『火口跡』）内の

西南部分に位置している。（第178図）（成川遺

跡の地形とグリッド図『五万分の一地図参照』

■昭和三十二年五月。海浜埋め立て用の採土作

業が行なわれていた山川町成川の畑で、おび

ただしい数の人骨が出てきた。

地図OK

・弥生時代中期を主体とする古代墓地の跡と

は知る由もない作業員たちが、気味悪がって

警察へ届け出たことから――日本の考古

学史に残る成川遺跡発掘のドラマは始まる。

■国の対応は極めて早く、

「国（文化財保護委）が直営で発掘すべき

重要な遺跡」

という判断をくだす。

■調査は、翌（昭和）三十三年七月二十三日から八月五日

コクヨ　ケ－20　20×20

こと

採 大カンの 異体字

688P-7/12

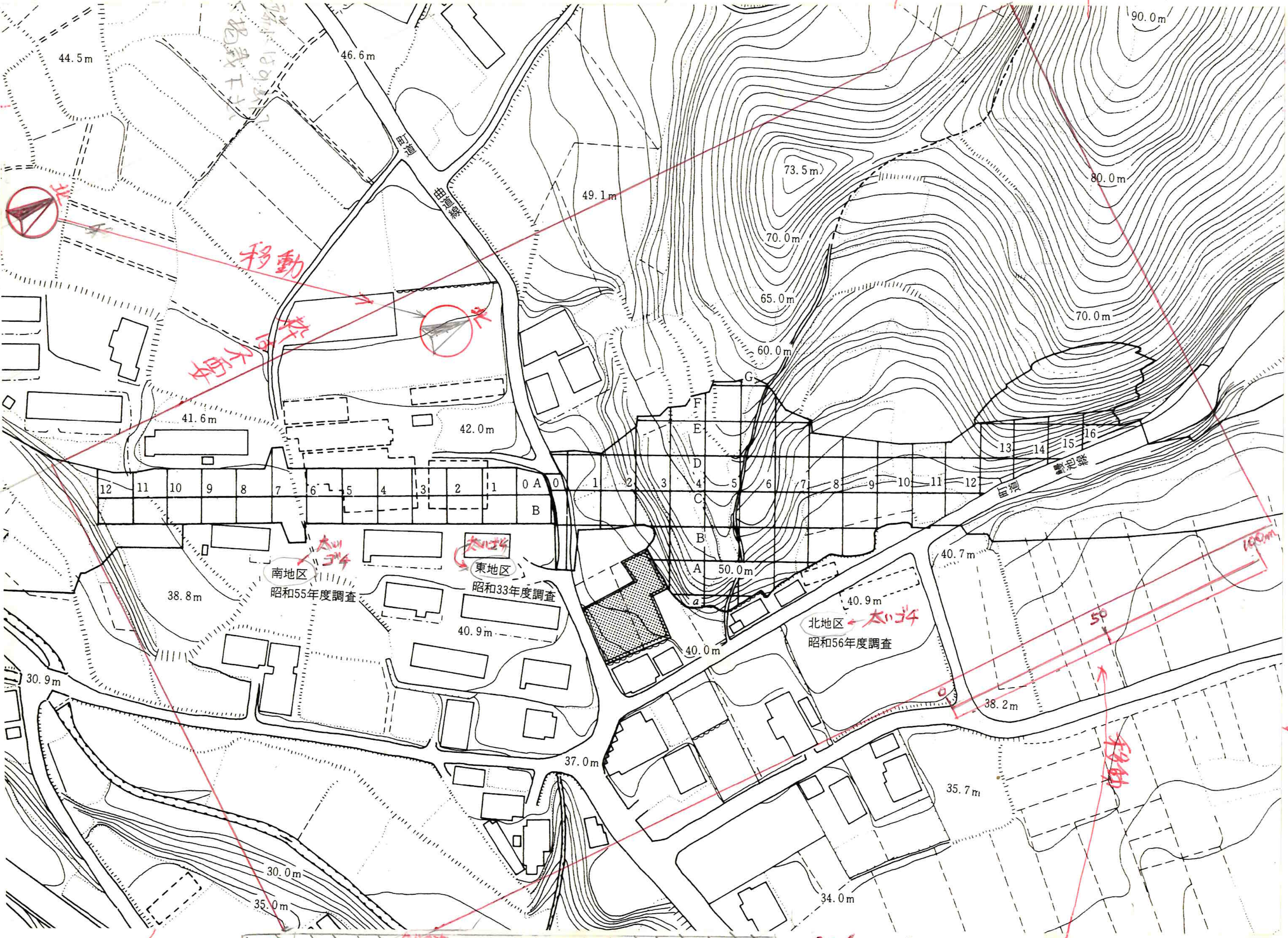
石頁右端は目いっぱい
大きく掲載下さい

右頁の右端

・右頁の右端上下へ大きくはみ出させて下さい。

第178図 成川遺跡の地形とグリッド図
1404 なりかわ
1304 ③-7頁参照

北地区
東地区
南地区
太いゴチに変更して下さい。

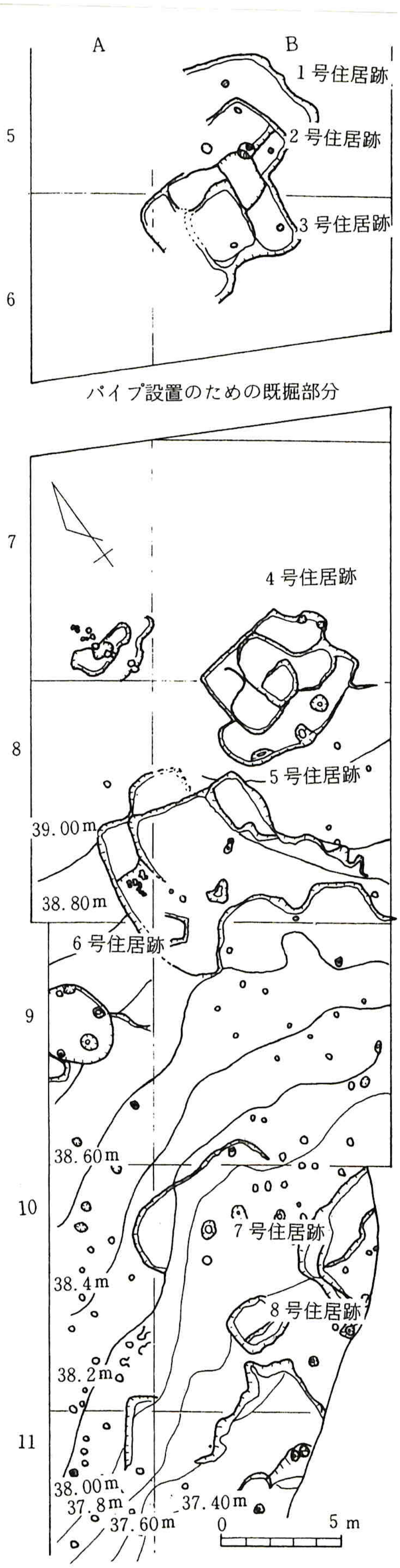

トル
トル
トル
トル
北
移動
北
枠は不要
44.5m
46.6m
90.0m
町道
町道由道線
49.1m
73.5m
80.0m
70.0m
65.0m
70.0m
60.0m
41.6m
42.0m
G
F
E
D
C
B
A
a
12
11
10
9
8
7
6
5
4
3
2
1
0
13
14
15
16
町道
由道線
太いゴチ
太いゴチ
南地区
昭和55年度調査
東地区
昭和33年度調査
38.8m
40.9m
50.0m
40.7m
40.9m
北地区
太いゴチ
昭和56年度調査
40.0m
30.9m
38.2m
100m
50
0
移動
37.0m
35.7m
30.0m
35.0m
34.0m
0
50
100m

1406 第 図 成川遺跡の地形とグリッド図 ③-7頁参照

306

・左頁右端に、上段下段に
またがり、上下へ大きく
はみ出して掲載
下さい。

688p-8/12



A
B
5
6
7
8
9
10
11
1号住居跡
2号住居跡
3号住居跡
パイプ設置のための既掘部分
4号住居跡
5号住居跡
6号住居跡
7号住居跡
8号住居跡
39.00m
38.80m
38.60m
38.4m
38.2m
38.00m
37.8m
37.60m
37.40m
0
5m

13QG

第179図 成川遺跡 南地区 弥生時代遺構分布図

半字分アケル 半字分アケル

12QG

『成川遺跡』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(24)鹿児島県教育委員会、70頁参照。

㊥692P―1/11 10行～ かごしま考古新地図　報告書ク地図　東地区　昭和33年調査
㊥691P―2/5 19行　改行　㊥702P―5/6 末行　㊥690P―8/10 19行 東地区 233体
688P―9/12　アケル
かごしま新 138P下　かごしま新 上　昭和33 十22 55　改行　下げる

まで行なわれた。

・約二週間で発掘された面積は七二六平方メートル、

・当時としては異例の大発掘で、人骨約二百体のほか、鉄器百数十点、完全に復元できる土器百個という空前の収穫が得られた。

・九州の南端にも、『弥生中期』（第3表参照）の文化が及んでいたのは、驚くべき発見だった

（崇神天皇即位（前九七年）ころから始まる遺跡なのだろう）（弥生中期の始め）

・この地域を『東地区』という。（①―一一三六～七頁。③―一七～八頁参照）

それから二二年後、国道二二六号バイパス建設のため（成川遺跡あたりをほぼ南北に走るバイパス）に調査が再開され、

(イ)『南地区』（成川盆地の西南端開口部』昭和五十五年十二月～翌五十六年三月）

(ロ)『北地区』（前記調査部分北東の丘陵地裾野一帯』昭和五十六年十月～十二月）

の発掘が行なわれた。

調査面積は『昭和三十三年調査（東地区）』のほぼ四倍に当たる。

こうして成川遺跡は、埋葬地の一部を残し大半が消滅した。（①―一一三八頁参照）

㊥688P―6/18 20行　成川　山川町　（第3巻）308　鹿児島県地図（赤色）　国道226号バイパス　報（1）―39頁

北地区 ㊟689P-2/11
東地区㊟688P-9/18 9行
かごしま新138P全上
報告書90P～96P
南地区の弥生時代であることを示す
688P-10/12
㊟688P-18/18 18行

〈南地区〉

■北側の比高差約十メートルの小丘陵から南側へゆるやかに傾斜している台地である。幅約十七メートル長さ約一一五メートルを調査した（第178・179図〈南地区〉㊟688P-9/18 ③一二五頁参照）

■下層から、指宿式を中心とする土器や石器獣骨など、縄文時代の遺物が出土。

■上層からは、ベッド状遺構を持つ竪穴式住居跡八基が検出された（①一一三八頁。③一三頁、九〇～九六頁参照）

・住居跡の基本形態は隅丸方形がほとんどで円形一基も見い出された（③一九〇頁参照）。

＊定かでないが、これらの竪穴式住居に住んでいたのは、扶余系般民の子孫達だったのかも知れない。~~（以下そう思わせる例を多々取りあげてゆきたい~~

・3、4、5、ク号の各住居跡は、ベッド状遺構を備えている。（③一九〇頁参照）

・床面に密着している遺物は少なく、1号と4号に磨製石鏃や、3号と4号と6号に石礫（小石）が有ったものの、土器などは浮いた状態で検出された。ク号住居跡の大型甕形土

㊟691P-4/6

309

コクヨ　ケ-20　20×20

ものの　次々頁8行

次さ頁『南地区内』

688ﾍﾟ—11/12

磨製石鏃もある　㊥688頁—16/18

㊥688ﾍﾟ—15/16でほぼ[illegible]

安引く四　新やまと (2)—66ﾍﾟ　㊥685ﾍﾟ—2/4

から　ダブり

器などは、床面から約五〇センチ上部で出土した。（③—九一頁参照）

＊恐らく、〈住人らが家財道具の一切合切を持ち出した後〉

——空き家となった竪穴式住居の凹陥部内へ、~~磨製石鏃や礫（小石）や~~〈高所にあった〉各種土器の欠片等が少しづつ入り込んできたのだろうと思われる。

■土器は弥生時代のほぼ全時期にわたるもの、主体は弥生中期（後半）の山ノ口式で、住居跡も同時期と推定された。（①—一一三八頁。②—一〇七頁参照）

■これらの『住居跡内』から出土した土器~~の一覧~~~~表~~を見てみると

(イ)丹塗土器（七点）

(ロ)高坏（二点。内一点は丹塗）

(ハ)刻目突帯文土器（三点）

が含まれており、注目される。

■多分、

〈大勢の隼人達の武装集団の中に、少数な

コクヨ　ケ−20　20×20

次頁で述べる　　山ノ口式 ㊞688ー8/10行　丹塗土器　　出土土器一覧表→㊞688ー11/8 14行で述べる　688ー~~13~~12/12　前々頁『住居跡内』

から扶余系般民の子孫達が居住していた~~とりうかとな~~のであろう。

・それでは、扶余系般民の子孫達の任務は何だったのだろうか。

(イ)軍事教練の一翼を担っていたのか、

(ロ)武器や食料等の調達を行なっていたのか

など種々考えられるものの、詳細は分からない。

~~参考迄に『南地区内』で出土した土器~~~~あるいは~~~~磨製石鏃~~~~を例示しておくことにしよう。~~

~~(2)第○表は、「丹塗土器」である。~~　688ー14/18

~~(3)第○図は、「丹塗土器」（一部）を示す。~~　688ー15/18

~~(1)第○図は、住居址内から出土した弥生中期後半の「山ノ口式土器」（一部）である。無文の土器に一～三条の突帯を巡らせるものが多い。~~　688ー13/18

~~*平底の土器が多いようだ。~~

~~(4)第○図は、「磨製石鏃」である。~~

こと

可能性 ㊥690P−10/10 3行

㊥690P−9/10 古代の日本3九州 107頁

・近畿には家の戸口近くで小甕埋が出土している

689P−1/6

トル ~~・捨（す）てられていた磨製石鏃（ませいせきぞく）が、住居内（じゅうきょない）へ転（ころ）がり込（こ）んだ可能性もある。~~

~~▣どの地方（ちほう）の、どんな部族（ぶぞく）によって作（つく）られた磨製石鏃（ませいせきぞく）なのかは、今後（ご）明（あき）らか（あき）になる[illegible]（トル）だろう。~~

▣~~[illegible]~~（トル）昭和三十三年の東地区（ちく）発掘調査の際（さい）、

「土壙墓（どこうぼ）にまじって、小児用（しょうにょう）壺棺（つぼかん）・甕棺（かめかん）が総数（そうすう）四〇例以上検出（れいいじょうけんしゅつ）された」

といい、

「小児用（しょうにょう）壺棺（つぼかん）・甕棺（かめかん）以外（いがい）の土器（どき）は、散乱（さんらん）した状態（じょうたい）で発見（はっけん）された。それらは本来（ほんらい）、土壙（どこう）上の小封土（しょうふうど）に供献（きょうけん）されたとみられる」

という。（②―一〇七頁参照）

・東地区（ちく）で見い出（みいだ）された小児用（しょうにょう）壺棺（つぼかん）・甕棺（かめかん）には（南地区に住む）扶余系殷民（ふよけいいんみん）の子孫（しそん）らの子供達（こども）が葬（ほうむ）られたのかも知れない。

⊛ トル ~~。但し、こうした小児用壺棺・甕棺が、どの年代（ねんだい）に埋（うず）められたのかについては、今少（いますこ）し、検討（けんとう）した方（ほう）がよいのかも知れない。~~

㊥688ᴾ－7/18
㊥689ᴾ－3/11

南地区 ㊥688ᴾ－10/18 1行

南地区 ㊥688ᴾ－6/ 1行

115体 ㊥692ᴾ 2/11

689ᴾ－2/6

《北地区》

■北地区の遺跡は、丘陵地裾野の南側斜面に（東方へ突出している）立地している。（第178・180・181図 ③ー一三三頁参照）

㊥688ᴾ－7/12 180 181

㊥688ᴾ－7/18
㊥689ᴾ 3/11

■北地区では、古墳時代の四～六世紀にかけての土壙墓一四一基を検出した。

・人骨は、骨粉を含めて、一一五体。

・埋葬法には、脚部を折り曲げた屈曲葬と、両足をまっすぐ伸ばした伸展葬があり、全体的に女性に屈曲葬が多い。↑↑↑（①ー一三八頁。③ー一三三ー四頁）

■北地区で出土した鉄製品には、剣（諸刃の太刀）・刀（片刃の刃物）・矢じりなどがあり、計三八点見つかった。（写真図版135参照）

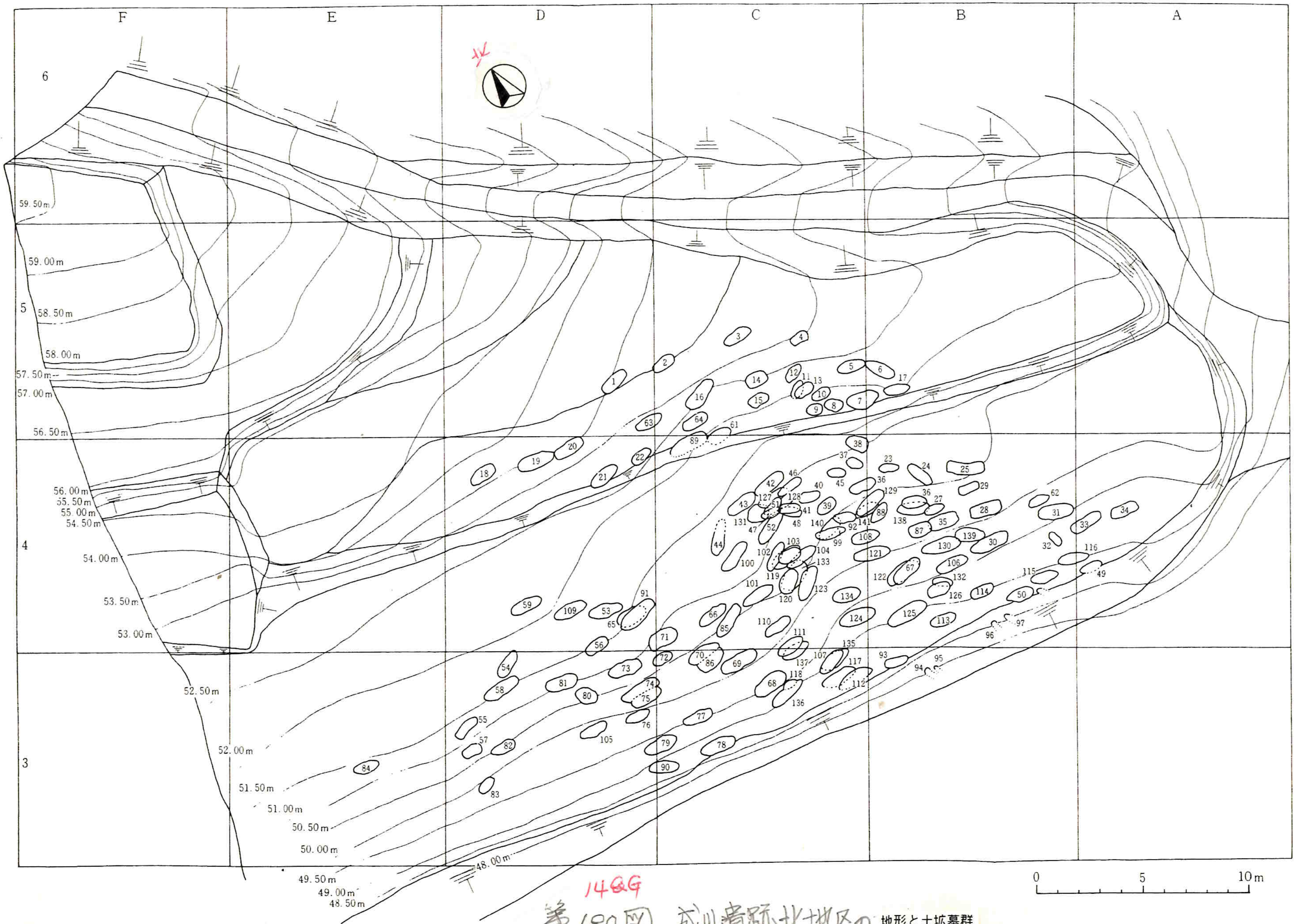
㊥689ᴾ－5/6

313

新や(2)－136ᴾ青谷上寺地遺跡 109体 とある 南側

左頁の上半分に掲載下さい。

689P 3/6


F
E
D
C
B
A
6
5
4
3
北
59.50m
59.00m
58.50m
58.00m
57.50m
57.00m
56.50m
56.00m
55.50m
55.00m
54.50m
54.00m
53.50m
53.00m
52.50m
52.00m
51.50m
51.00m
50.50m
50.00m
49.50m
49.00m
48.50m
48.00m
0
5
10m

14QG

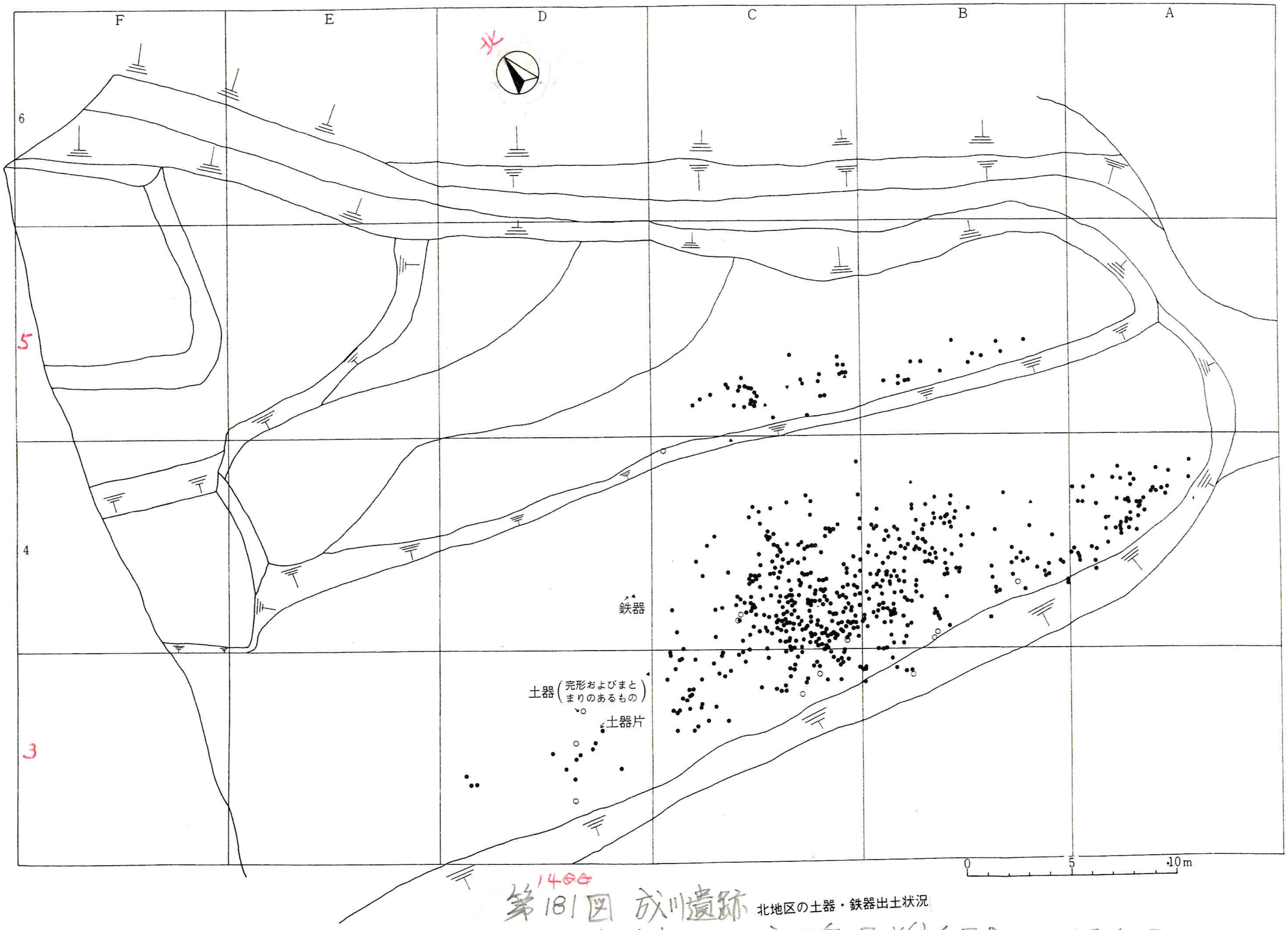
第180図 成川遺跡北地区の地形と土拡墓群

13QG

『成川遺跡』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(24) 鹿児島県教育委員会、141頁参照。

314

左頁の下半分に掲載下さい。 [illegible] 689P－4/6


F
E
D
C
B
A
6
5
4
3
北
鉄器
土器（完形およびまとまりのあるもの）
土器片
0
5
10m

追加→

追加→

14QG

第181図 成川遺跡 北地区の土器・鉄器出土状況

13QG

『成川遺跡』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書（24）鹿児島県教育委員会、139頁参照。

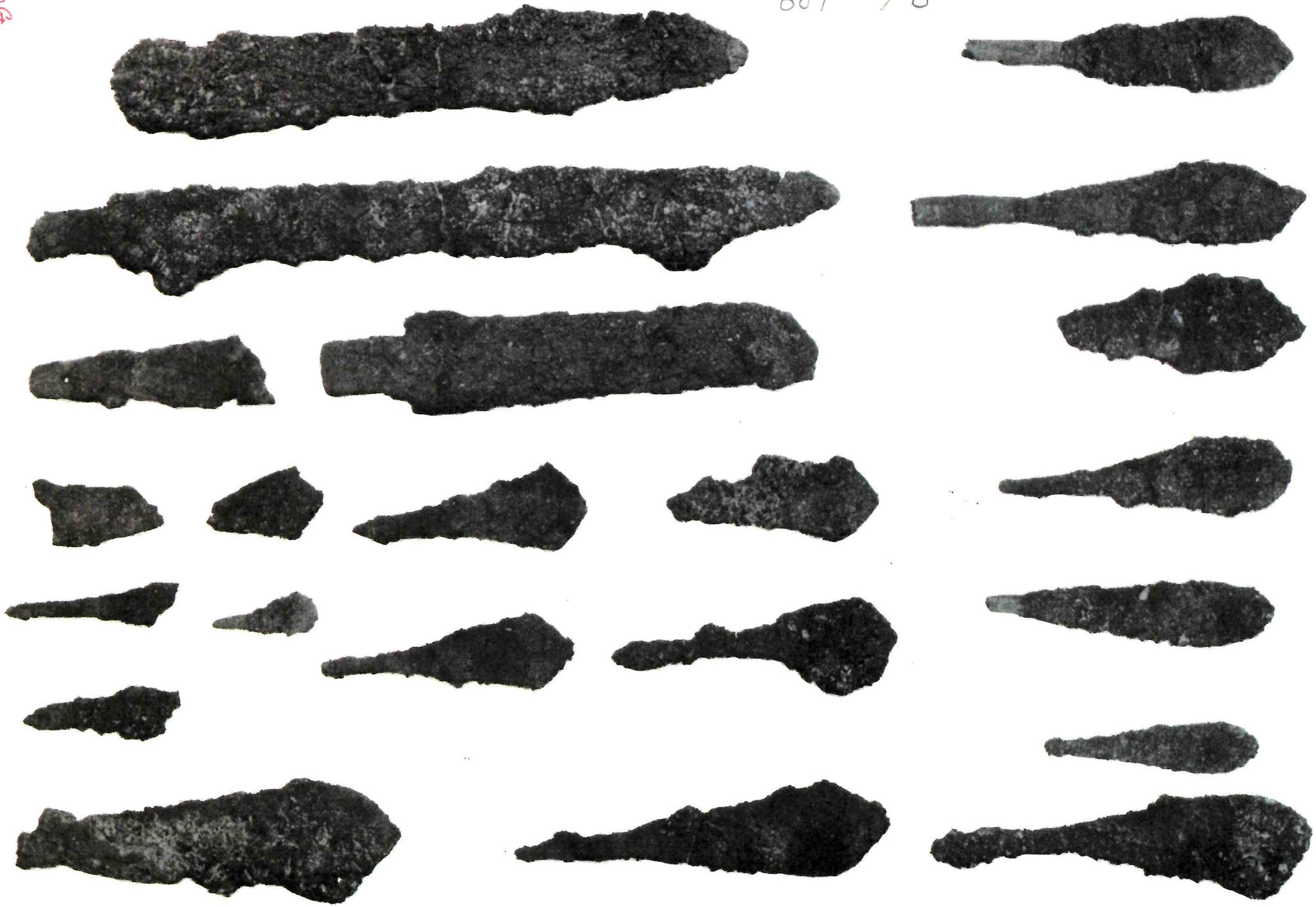
315

[illegible]690P
－10/10
1～4行

図版39

右頁の全面に、大きく
掲載して下さい。

689P－5/6



14Q4
写真図版135 成川遺跡、北地区出土の

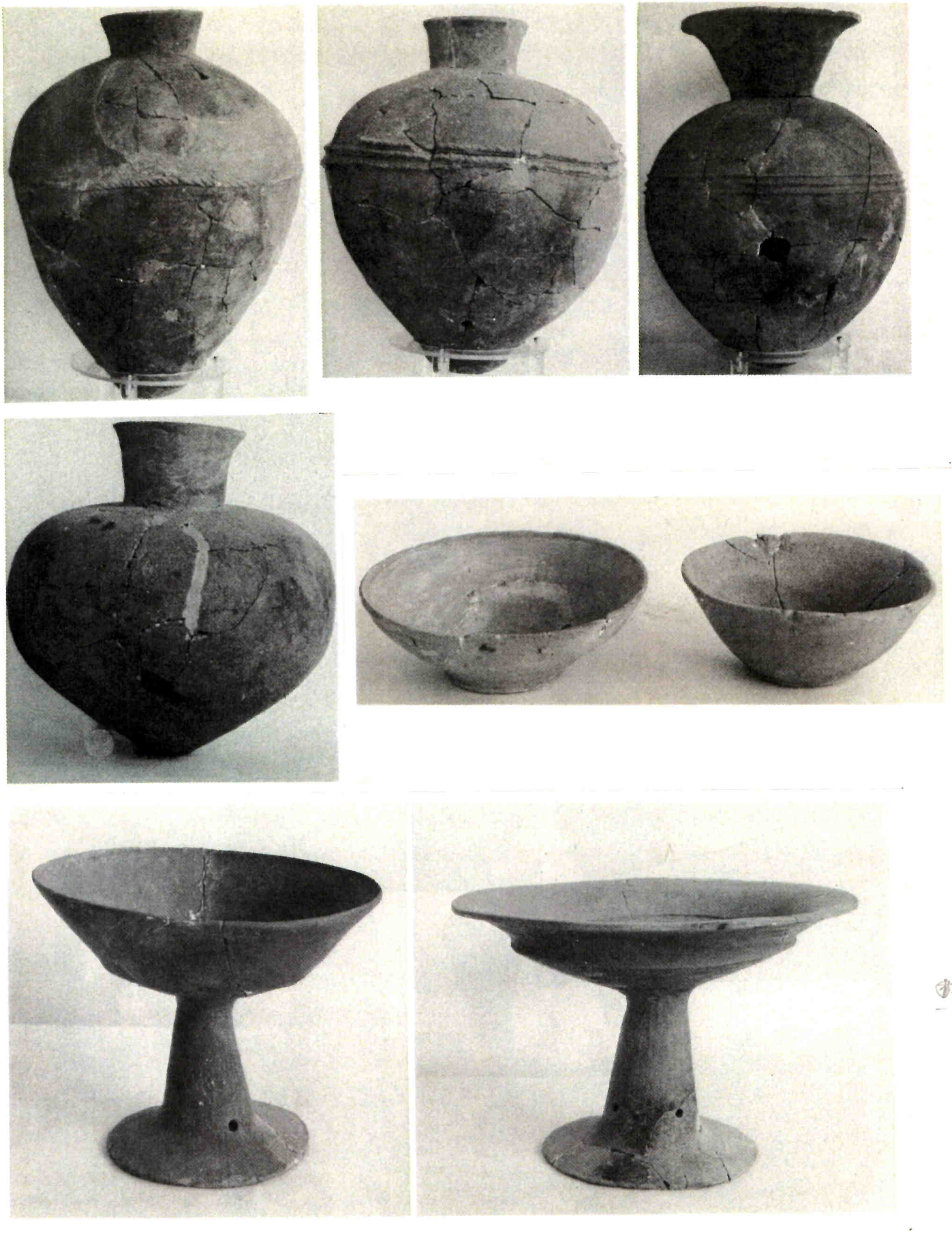
鉄器

『成川遺跡』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告(24) 鹿児島県教育委員会、226頁参照。
◦写真図版133〈阿蘇谷地出土の鉄製武器〉とかなり似ているような印象を受ける。

て ⑮684P－7/6

・左頁全面に大きく
はみ出して掲載下さい。

689P－6/6



317

14QG 写真図版 136 成川遺跡北地区出土の土器

13QG 『成川遺跡』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告(24)鹿児島県教育委員会、172～9頁(図)、224～5頁(写真)参照。

12QG ・右下の高坏（たかつき）の上半部は、第176図〈阿蘇盆地の狩尾（かりお）・湯の口遺跡14号住居跡で出土した高坏形土器〉とよく似ている。↖ ↘ ㊤687P－6/17 ↖ ↘ タイトル㊤686P－1/12 2行 かりお

※図は上末①－1/2 130Pとも酷似している ㊦492P－9/8 池上曽根出土の木製2脚付き盤（さら）

↰ ㊤687－6/12 狩尾・湯の口 巻頭図版114に似ている

例えば 次頁 2行 6例　第6例の平均160.8cmから これは恐らく140cm台下
頭形示数 ⑮518p 1/9　690p～1/7

ちゃくがん 着岸した　とうちゃく 到着した

~~いうまでもなく~~断言できるわけではないが、
次のように解釈してみたい。（以下、第3表参照）
(1)前一〇四年ころ、太伯の後（呉王の子孫）と自称する者達が、閩越の東冶あたりから東遷を開始し――――白川河口の北岸（河内）あたりに上陸した。（既述）
(2)しかし、箕子達に追いはらわれ、倭人等は、南へ南へと下っていった。
(3)薩摩半島南東端（指宿）付近に漂い着いた倭人達は、成川遺跡（もしくはその近く）に練兵場を設け、――薩摩隼人等の特訓を行なった。~~（扶余系敗民の子孫らに指示し）~~

・九州南端以南の者は、平均身長が一五〇センチ台と極端に低い。（第160図、頭形示数の分布①一七八頁下段参照）

・倭人達は、そのような低身長の人々の中から、特に背の高い者等を呼び集めたのだろうや

・たとえば、昭和三十三年の東地区調査に参加し

⑮690p-7/10 ではなかろうか　新や(2)-363p　=318 17行

コクヨ ケ-20 20×20

see! ㊥690ᴾ-4/11 鉄骨か有　㊥513ᴾ-1/5 松下孝幸氏　690ᴾ-2/7　タイトル ㊥510頁　㊥513ᴾ-1/5 身長 162〜4cm　土井ケ浜　㊥514ᴾ-1/11 3行

た、金関丈夫氏の報告によると、

「男性六例の推定平均身長は一六〇・八㌢で、北部九州の長身人達（一六三㌢前後）に比べると、やや低かった。（第五章〈六つばかりの種族〉の項参照）また、上から見た頭の形は、前後の長さに比べて左右の幅が著しく広い短頭（男性二〇例の頭形示数八三・九）であった。

つまり〔成川遺跡の東地区に埋葬された〕成川人は~~古墳時代に生きたが形質と~~縄文人的な特色を持っていた」

という。（写真図版137〈成川遺跡の弥生人〉）

①—一四〇頁。③—二五六頁参照）

・また、昭和五十六年の北地区調査で出土した人骨を鑑定した松下孝幸氏（長崎大学医学部助教授）も、ほぼ同様の見解だった。ただし、

「身長については「四肢長骨の最大長さを計測できる遺体が一例も無かった」（鹿児島県教委編『成川遺跡Ⅱ』）と、あえて推定値を求めなかった」

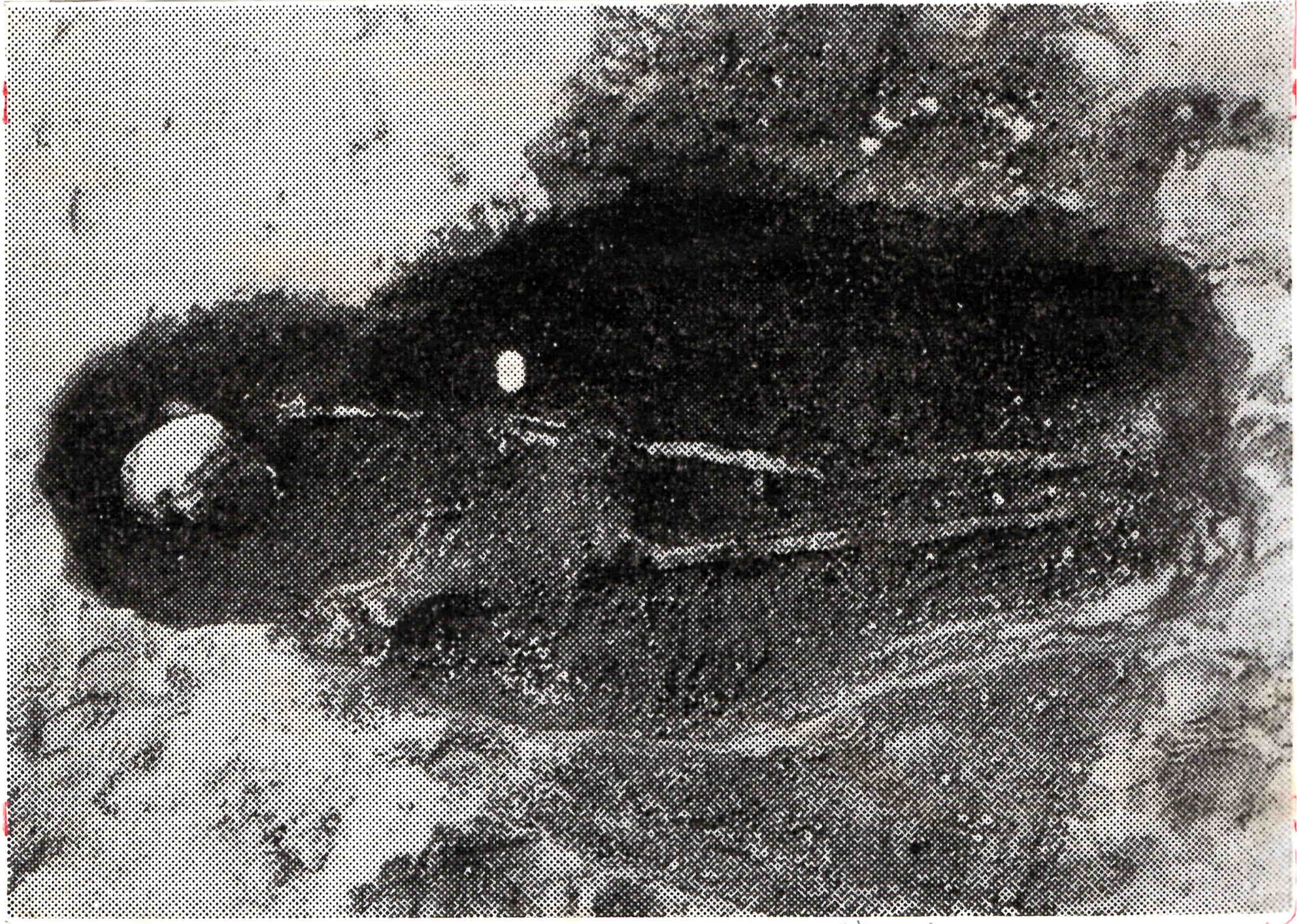
という。（①—一四〇頁。③—二五六頁参照）

(4)極南界（八代・宇土地方）に倭奴国を創建

コクヨ ケ-20 20×20　土井ケ浜 英雄 新や(2)-262頁　319　報告書256ᴾ　頭形示数 新や(2)-363ᴾ ㊥81.0〜81.9　新や(2)-340ᴾ下

・頁の上半分に掲載下さい。
・690-4/11の、[illegible]下さい。

320P



14Q4

690P-3/7

13Q4

写真図版137　成川遺跡の人骨　〔昭和33年、（東地区）土壙墓内の41号人骨〕

『指宿市誌』指宿市役所、昭和60年10月25日発行、175頁参照。

12Q4

・「成川遺跡において、約200体の人骨を検出（けんしゅつ）した。成川遺跡人は、顔（かお）が低い、眼窩（がんか）（めだまの穴（あな））も低い、下肢（かし）ことに脛骨（すね）（けいこつ）（むこうずねの骨）が長い、脛骨偏平（けいこつへんぺい）が強い、といった特徴（とくちょう）が有り、今日のサツマ地方人とよく似（に）ている」

という。

320

テレ
690P-4/11

690P－4/7

国692P－5/11 20行　前100 ＋500 600
殷 国691P－3/5 20行

同文 国690P－3/10 10行～
2行

した倭人（わじん）達は、〈扶余（ふよ）系殷民（いんみん）の子孫等（しそんら）が作（つく）った鉄製武器（てっせいぶき）を投馬国（薩摩国（さつまのくに））へ送（おく）り、薩摩隼人（さつまはやと）らの武術（ぶじゅつ）向上（こうじょう）を図（はか）った〉のであろう。

(5)こうして、成川（なりかわ）遺跡の地（ち）での軍事教練（ぐんじきょうれん）は、弥生（やよい）時代中期前半の前一〇〇年ころ始（はじ）まり、古墳（こふん）時代の六世紀前半期（せんはんき）に至（いた）るまでの約六〇〇年間続（ねんかんつづ）けられたという次第（だい）なのではなかろうか。

＊

前半期（せんはんき） 国690P－3/10 6行

コクヨ　ケ－20　20×20

いまひとつ (あ)692ｐ―6/11 14行

かごしま新140ｐ　古代の日本3九州 107頁上へ　かごしま新 140頁下　690ｐ―5/7　かごしま新140ｐ (あ)688ｐ―6/16 3行 東地区約200体　出土総数 115体

①ところで、成川（なりかわ）遺跡の最大（さいだい）の特色（とくしょく）な、なんといっても、「大量（たいりょう）の人骨（じんこつ）が出土（しゅつど）した」ということ（こ）だろうや

■古代（こだい）の墓地（ぼち）の跡（あと）だから、いわば当然（とうぜん）ともいえようが、

《三四八体（たい）（うち昭和三十三年の東地区（ちく）調査分は二三三体（たい））》・

という数（かず）は、南九州はもちろん、全国（ぜんこく）でも例（れい）がない。（①―一四〇頁参照）

②もう一つ、人骨（じんこつ）とともに成川（なりかわ）遺跡を特徴（とくちょう）づけるものは、

「実（じつ）に、三〇〇点（てん）を超（こ）える『鉄製品（てっせいひん）』」

である。（①―一四〇頁参照）

■こう言（い）う。

(1)完形品（かんけいひん）には、長剣（ちょうけん）十二、短剣（たんけん）四二、大刀（たち）一、小刀（しょうとう）十一、矛（ほこ）三、鏃（やじり）一五〇、大型鏃（やじり）九

などの武器（ぶき）のほか、鉇（やりがんな）一、斧（おの）一

がある。（①―一四〇頁。②―一〇七頁参照）

(2)また成川（なりかわ）遺跡（東地区（ちく））からゃ他（ほか）に類（るい）をみない

(あ)692ｐ―6/11 14　もう一つの特徴は へ

古代の日本3九州 107ｐ上 東地区完形品198点　ケー20　20×20　←矛については後で述べる　次頁15 特長　322　前代(2)-236ｐ 青谷上寺地 109体 (あ)689ｐ―2/11 (こと)

かごしま巻 142P下 1行へ

690P — 6/7

かごしま新 142P下

・中九州のあちこちから持ってきたのか？

実つき 改行

縄文の森から[illegible]

双脚状の鉄器や、魚形鉄器、縦に二条の透かし彫りを有する大形鏃（軽量化を図る為に透かしを設けたのだろうか）などが出土した（②—一〇七頁。④—一三七〜一三九頁参照）と解説されている。

▨武器は、あくまでも実用本位である。

・鉄鏃は変化に富んでおり、細分すると十数種にのぼる。（②—一〇七頁参照）

▨そして注目されるのは、東地区・北地区の埋葬様式である。

▨（先述の東地区から出土した小児用壺棺・甕棺をのぞくと）遺構はいずれも簡単な造りの土壙墓ばかりで、副葬品としての装身具が少なく、特別な取り扱いをした埋葬例は認められなかった。

・遺跡自体は古墳時代が中心なのに、土器はきわめて弥生的な特長を持っていた。

・土器や鉄器の埋納の仕方もよく見ると特殊だ。

・土壙墓に副葬したと思われるのは、剣や鏃など鉄器がわずか六例あるだけで、大多数は土壙墓より三〇㌢ほど高い位置で発見された。（①—一四二頁参照）

＊鉄を熔かして再利用せずに、こんなにも多くの武器を、土壙墓より三〇センチばかり高い所に置いた理由は明らかでない。

である　前頁12行 特徴 ← 次頁10行

323

⑤689P—1/11

690P―7/7　前頁12行　かごしま考古 140下末3行　かごしま考古 142下　⑪692―6/10 10行で述べる　縄文の森から 34頁〜37頁　可能性　⑪689P―1/11 12行

・しかも第180・181図から分かるように、土壙墓近傍からだけでなく、かなり遠い地点からも『鉄器』が出土した。

・尚、表層の遺物は、後年、多少散らばった可能性がある。（④―二三七頁右側二〜五行参照）

~~・ともあれ、こうした状況は、〈『鉄器』が特定の死者のためにささげられたのではない〉ということを示唆しているのであろう。（①―一四二頁参照）~~

・そして、〈おびただしい数の鉄器とは全く対照的な〈身体装飾品〉の少なさが、いっそう成川遺跡の特殊性を際立たせている。（①―一四〇頁参照）

・どうやら、〈とある村の共同墓地〉というわけではなさそうだ。

＊

ある

こと

とある

かごしま考古 142P上

天つき
改行

天つき

691P—1/5

685P

主査（しゅさ） 主となって取り調べること
かごしま考古 P141

かごしま考古 141P上

かごしま考古140P

かごしま考古 142P

~~げられたのではなく、墓地全体（ぼちぜんたい）に陪葬（ばいそう）された~~~~のかも知れない~~~~ことを示している。~~

~~あとに残（のこ）る者達の活躍・発展（かつやく・はってん）を祈（いの）る等の別（べつ）の意味（いみ）で~~

~~そして、おびただしい数（かず）の鉄器（てっき）とは対照的（たいしょうてき）に、身体装飾品（しんたいそうしょくひん）が少（すく）なかったことが、いっそう成川遺跡（なりかわいせき）の特殊性（とくしゅせい）を浮（う）き彫（ぼ）りにしている。~~

では、これら大量（たいりょう）の人骨（じんこつ）と鉄器（てっき）は、いったい何（なに）を意味（いみ）しているのだろうか。

池田耕一・鹿児島県歴史資料センター黎明（れいめい）館（かん）主査（しゅさ）は、

「武器（ぶき）の多（おお）さなども考慮（こうりょ）すると、戦闘集団（せんとうしゅうだん）としての可能性（かのうせい）が強（つよ）い」

という。

一方、文献史学（ぶんけんしがく）の立場（たちば）から、中村明蔵・鹿児島女子短大助教授は、古墳（こふん）時代ころ鹿児島湾を中心に大和（やまと）と対決（たいけつ）する一大勢力（いちだいせいりょく）があったと推定（すいてい）し、

「成川人（なりかわじん）たちは、大和政権（やまとせいけん）に対（たい）する防衛任務（ぼうえいにんむ）を負（お）わされていた隼人（はやと）ではなかったろうか」

という。

たしかに、鉄器（てっき）などの出土品（しゅつどひん）を見（み）る限（かぎ）り、

かごしま考古 142P下11行

こと　691ｐ－2/5

新やまと－37ｐ
南の狗奴国→東の狗奴国

こと→㊄690ｐ－10/10 8行 こと

「キナ臭さ」かごしま考 142ｐ上 13行

遺跡の周辺にはキナ臭さが漂う。（①－一四一～二頁参照）

＊

■しかし果して、成川遺跡の墓地を営なんだ人たちは、南九州への侵攻を企てる大和政権と~~相手として~~戦うのを任務とする集団だったのだろうか。

■もしもそうだとすれば、〈国家（＝狗奴国）の為に防衛活動をしなければならない筈の戦闘隊員が、最前線（北薩の方）にではなく、戦場から最も遠い薩摩半島の南端域（揖宿郡山川町成川あたり）へ集結していた〉ということになり――いざという時、間に合うのだろうかと疑問視される。

■また、これだけの大量の鉄器を、隼人達が自らの技術で作ったとは、到底考えにくい。

■しかも、九州北半部で普遍的に見られる形状の〈鉄器〉（剣・刀・矛・鏃・刀子・鉇・

云618ｐ

ケン つるぎ

㊄688ｐ－9/12 6行 弥生中期

326　前頁17行 防衛任務

㊥692P−5/11 10行
㊥692P−5/11
同文 ㊥690P−4/7

691P−3/5

㊥702P−6/6

斧（おの）などを、どうしたわけで、隼人（はやと）達が所持（しょじ）していたのだろうかと不審（ふしん）に思われる。

*

10 この物語では、

(1)箕子（きし）の支配（しはい）下にある百余国（よこく）の極南界（きょくなんかい）（宇土（うと）・八代（やつしろ）地方）に倭奴国（わのなのくに）を建国（けんこく）した倭人（わじん）達が、~~[illegible]~~ 山川近傍（やまかわきんぼう）の盆地ト成川（なりかわ）乃へ屈強（くっきょう）な薩摩隼人（さつまはやと）らを集（あつ）め、鉄製武器（てつせいぶき）を与（あた）え、戦闘軍団（せんとうぐんだん）とし、やがて来（く）る箕子（きし）達との決戦（けっせん）（弥生（やよい）後期半（なか）ばの倭（わ）国大乱（こくたいらん））に備（そな）えて、厳（きび）しい教練（きょうれん）を行（おこ）なった。

(2)ト倭国大乱（わこくたいらん）乃後（ご）も、東の狗奴国（かぬこく）（中国・近畿地方）との戦（たたか）いに向（む）けて、特訓（とっくん）が続（つづ）けられた。

(3)さらにそれ以降（いこう）も、東の蝦夷（えみし）の国（くに）を討伐（とうばつ）する為（ため）、九州最南端部（さいなんたんぶ）ト成川（なりかわ）乃での武術演習（ぶじゅつえんしゅう）が、古墳（こふん）時代の六世紀前半期（ぜんはんき）に至（いた）

ただし 次の(3)行 天つき改行

691ᴾ－4/5

こと 為（ため） 前頁19行 前々頁15行

㊥690ᴾ－5/～

るまで継続（けいぞく）された〃

と考えてみたい。（一部既述）

■さらに述べると、

〈成川（なりかわ）の盆地周辺地域（ぼんちしゅうへんちいき）では、外来者（がいらいしゃ）が侵入（しんにゅう）しないように、厳重（げんじゅう）な検問（けんもん）を行（おこ）なっていたのだろう〉

と推察される。

■なお〃~~未だ確認されていないが~~ トル 成川（なりかわ）遺跡あたりには〃

(1)薩摩隼人（さつまはやと）の戦闘集団（せんとうしゅうだん）が起居（ききょ）していた兵舎（へいしゃ）〈高床式住居（たかゆかしきじゅうきょ）なのか、竪穴式住居（たてあなしきじゅうきょ）なのかは不明（めい）〉

(2)総指揮官（そうしきかん）ら〈倭人（わじん）達〉の住宅（じゅうたく）〈高床式住居（たかゆかしきじゅうきょ）〉

(3)扶余（ふよ）系殷民（いんみん）の子孫（しそん）達が生活（せいかつ）していた弥生（やよい）時代や古墳（こふん）時代の住居（じゅうきょ）（竪穴式住居（たてあなしきじゅうきょ）もしくは高床式住居（たかゆかしきじゅうきょ））

があったのであろう〃と思われる〃

＊もっとも高床式住居跡（たかゆかしきじゅうきょあと）は〈竪穴式住居跡（たてあなしきじゅうきょあと）と比（ひ）

竪穴式住居 8件 ㊥688ᴾ－17/18 7行

のだろう

のであろう

㊥683P—1/4

古代の日本3九州 107P上

大きい いたいし 板石

691P—5/5

立石 立てるように据えた石
立ててある石

較すれば」かなり発見しにくそうである。

㊤

「成川遺跡の『立石』『立石土壙墓』

■成川遺跡東地区調査において注目されたのは、約三〇基の立石（板石）だった。

■「東地区の」立石には二種類存在し、

(1)墓壙の上や、そのかたわらに、一種の標識のように立てられていたもの「

(2)近くに、埋葬した形跡が無いもの」

があった。（①—一三八と九頁参照）

■安山岩板状石からなる立石は、全長一〜二・六〜。大半が折れ、破損していた。

・立石は、全て偏平。

・その平らな面を南北に向けて立設し「基部のまわりには根石を埋め込んでいた。

・基部を酸化鉄で彩色するなど、気配りが感じられる」

かごしま考 138P 立石墓
古代の日本3九州 106P 立石土壙墓